令和7年度　　園評価書

園番号　　7　園名　静岡市立瀬名川こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
自ら考えて 行動する子	またやりたい もっとやりたい	子どもが、自分からやってみたいと思うことに向かい、自分なりに工夫したり試したりしている	泡作りでは泡の硬さ、感触を作りながら試したり、泥だんご作りでは友達と教え合ってり真似したり、崩れてもまた作る姿があり、個、年齢によって子ども自身が必要なものを選び、量や数を調節しながら繰り返し試して遊んでいる。	A	A	・子どもを大切にして寄り添う職員とその中で安心した子どもたちの能動的、主体的な姿が日常的にみられる ・瀬名川こども園はこども園の理想の姿の一つだと感じている ・子どもがやりたいことを見つけられやりたいことができる場所、道具が揃っているので「今やりたい」が実現できていると感じる	・日常的にその場に来ればその遊びを始められる、子どもの目にするところに、選び取れる環境が用意されており、やりたい「今」の瞬間からやり始められるような環境作りや、子どもの姿や興味関心を捉えた関わりを行っていく
		保育者が、子どものやってみたいと思うことを一緒に楽しんだり真似たりして、子どもの興味関心を捉えている	保育者が子ども達と一緒に遊びを楽しみ、つぶやきや表情から子どもの思いを汲み取り、子どもの目線になって、傍に寄り添うことで表現遊び、ステージごっこなどの遊びが室内外でつながり、子ども達の工夫やイメージの変化を捉え、興味をつかんで環境づくりに生かした。	A	A		
		子どもが自分で選んだり、考えたりできる素材や教材が用意されている	乳児はガソリンスタンドなどイメージしやすい環境を用意したり、幼児は草花、木の実、水など四季に伴い扱う自然物や素材を用意した。また、すぐに手に取れ、子どもの目線にあり同じ場所に置くことでイメージがしやすい環境を用意してきた。	A	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	会議や研究保育を通して、就学までの園児の育ちについて学びあい、連続性を意識した保育計画を作成している	研究保育や週案を用いた会議の中で各学年の具体的な姿を挙げ、遊びや育ちのつながりを共有し、次年度への経験のつながりや子どもの育ちを見通して、各担任が自身の保育計画に反映している。	A	A	・日誌等の記録や書くことが減ってきていると思うが、本当に必要なのか常に検討していくとよい ・週案を通して子どもたちの変化を見てくれている ・園、保護者、ソーシャルワーカーで子どもの様子を共有している ・環境会議などで子どもの育ちに必要な準備、環境、整備については職員が話し合っていることが伺え、子ども達の「やりたい」を見つけてくれている	・週案や日誌は子どもの姿や育ちを見通し、保育内容を考え作成し、保育の振り返りを繰り返し行い、子ども理解を深めていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の生活リズムを理解し、子どもの育ちを保護者と共有しながら保育を行っている	参加会時に保護者と生活リズムを含めた子どもの様子を伝え合うことで理解が深まったり、ソーシャルワーカーが参加して面談等行い個別に対応したり、送迎時の伝達やコドモンでの健康状態の共有を行い、日々子どもの育ちの共有を行っている。	A	A		・子どもにとって心身が充実する生活を送れるように家庭と子どもの姿を伝え合いながら、生活リズムを整える大切さを保護者に向け発信していく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもが「またやりたい」「もっとやりたい」と思ったときに手にすることができる環境が用意されている	環境会議や乳児、幼児会議で子どものやりたいやってみたい気持ちを汲み取り、職員間で伝え合うことで、子ども達の興味関心に合った遊びの用途の道具を考えて用意したり、保育者も子どもと一緒に遊ぶ中で、遊びの旬に合った用具を見つけたりしながら環境を改良している。	B	A		・子どもの今やりたい気持ちに応えらるような環境つくりを行い、子どものもっとやりたい、またやりたいという思いを実現できる環境を再構成していく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	災害に応じた避難行動を理解し、自身と園児の身を守るための行動を取ることができている	南海トラフ地震などの震度5強以上の災害を予想して、第２避難場所への避難を実施した。避難経路の危険箇所を出し合った結果、災害状況によっては、園内での安全確保を優先する方法も考えている。また地震体験マット「ゆれたくん」を用い、避難訓練時に実際の地震の揺れを疑似体験した。中央警察署協力のもと、職員が自主研修として不審者対応実務訓練も行った。	B	A	・施設や職員間のこと、保護者のことは評価が低くなるが、まだまだやれるという前向きな心構えが評価の現れと感じる	・季節に合わせた備えの見直しができるように、防災リュックの点検や備蓄の入れ替え日を年間計画に組み込み、様々な想定での避難や対応を訓練で実施し、職員間で連携できる体制作りを行う
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	健康に過ごすための、生活習慣を子ども自身が理解できるよう各年齢に合った環境構成や支援が行われている	子ども達が栽培した野菜を使ったクッキングを行ったり、栄養士が各クラスを回り、噛むことの大切さを知らせるなどの食育を行うことで食べることに興味が持てるよう取り組んできた。また感染症予防に留意し、日々の手洗いうがいを丁寧に見守り、保育室や扱う玩具の消毒方法の見直しなどを行ってきた。	A	A	・夏野菜の栽培から作って食べるところまで繋がった食育ができている ・支援が必要な子の様子を職員間で共有できていると感じる。人との違いは間違いではない、違いも個性として考えていってほしい ・運動会などの行事においても「実は嫌い」という子もいる中、皆と同じことをやろうとするとつらい子が出てくる。それを意識して日々を作っていくことが大切だと感じます ・安全面あってこその安心して楽しむということだと感じるので、ミスやヒヤリは早期に、今改善する気持ちであってほしい ・家庭生活の中でも、スマホなどの使用は大きな問題ではないか。生活時間が夜型になるなど、幼小中で考えていかなければならないと感じます ・コロナも収まって、保護者と言葉を交わす時間をもっと増やせる工夫を期待したい ・若い職員たちが続くように、働き方改革も考えていきましょう	・調理の実体験を家庭につなげるために、栄養士と連携して、保護者に食育活動を発信したり、レシピや家でもできる食育の方法を伝え、食べること身体を作ることの大切さを発信していく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	子どもの発達を職員が理解し、一人一人の姿に合わせた支援や環境の工夫がされている	園児一人一人の姿や素敵なところを職員が記録して貼り出し、子どもの姿を職員間で共有することで、子ども達に肯定的な声掛けが増えるようになってきた。外部講師を招き、自園の保育者、振り返り、支援の方法を考える園内研修を行った。外部からの視点を受けることで響きをつけるべきことを確認し合える場を設けることができた。	A	A		・子どもの個性を肯定的に受け止め、関わることで、その子に合った支援が行えるようサポートプランを個々の変化に合わせて加除修正し、職員間で見合い子ども理解を深め関わっていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	各職員が自身の分掌の役割を理解し、協同して取り組めるよう発信の仕方を工夫している	分掌内の話し合いが不十分なところがあり、職員の協力体制はあるが、企画の分担や進捗状況の共有が難しかった。話し合いを行う際に次回の予定を決めるなどして、分掌の話し合いの初動が早くなるように議題を事前に配布し、クラス内で話し合い、分掌に話し合った内容を伝達するなど、報告連絡相談が円滑に進むように努めている。	B	B		・分掌だけで完結しないよう、分掌が発信した内容や企画に対して職員一人一人が自身の意見を持って会議や打ち合わせ時に情報交換する体制を作っていく
6 研　修	(1)研修体制の充実	職員が子どもの遊びの深まりや広がりについて自身の保育を振り返り、日々の保育に生かされている	職員が園内研修に参加することができるよう職員配置等を工夫し、研修が自身の保育を振り返る機会となっている。また研究保育は前後の学年の職員が参加することによって子どもの発達のつながりを捉えやすく、子どもの姿を共有することができた。また、担任は研修内で意見をもらうことで支援の方法の見直しができ、明日への保育を考えるきっかけになっている。	B	A		・職員が意欲的に園内研修で自身の意見を出し合えるような場を作り、活発な意見交換を行い、保育改善ができる体制を作る
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもの発達に合わせた環境が用意され、常に改善されている	ヒヤリハット事象を記録し、振り返りをすることで安全面に配慮した物の配置を考え、環境改善を行っている。また子どもの興味に合わせた環境に変化し続けるため、担任が集まり環境会議を行った。全園児が交流する園庭の共有については、遊びの基地を考えたり、遊びのすみわけから、発展も見通して話し合いを行っている。	B	B		・毎月、職員一人一人が自身の感じるヒヤリハットを持ち寄り分析することで、ヒヤリとする時間帯や場所、状態の配慮点を知り、安全な状態を保てるようにしていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	園での様子を発信するとともに、家庭の姿を保護者と共有し、語り合う機会を設け保護者の子育てを支援している	送迎時の保護者への伝達に加え、コドモンの配信や玄関のドキュメンテーション等で子どもの様子を伝えている。しかし、送迎が玄関という構造上の特徴もあり、日常的に担任に合うことが難しいことから、保護者はさらに担任と話がしたいという意見も聞かれる。語り合う機会と時間の確保が課題である。	B	B		・保護者と対話できる時間をできるように、年長は就学前面談を行い、他学年も随時面談を受け入れられる体制を作る
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	年間を通じて近隣園と交流を図り、地域の小学校へ幼児教育での子どもの育ちを発信している	同じ小学校区であるたちばな幼稚園の見学に保育教諭が行ったり、小規模連携園（２ヶ園）と自園２歳児との交流を行った。子ども達の小学校交流は1月以降に実施し始めており、職員が近隣小学校の参観を行い、学校生活へのつながりがもてる園内での経験を考え保育に生かしたり、本園の保育参観時に、小学校教諭に子どもの経験と育ちについて伝えるようにしたりした。	A	A		・小学校に向け、園だより、クラスだより、せなっこだよりを届け、自園の子どもの育ちを発信していく
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	園周辺の施設や地域の乳幼児との交流を通して、こども園の園児と関わる場を設けている	高齢者施設りいふへの訪問では、子ども達の普段楽しんでいることを披露し交流を楽しんできた。おしゃべりサロンでは、園児も同じ場で一緒に遊んだり、普段の姿を披露する場を設けることで未就園の親子との交流の機会を持つことができた。	A	A		・おしゃべりサロンで園児が踊りや手遊びを披露したり、地域の未就園児と在園児が一緒に遊ぶ場を作り交流していく